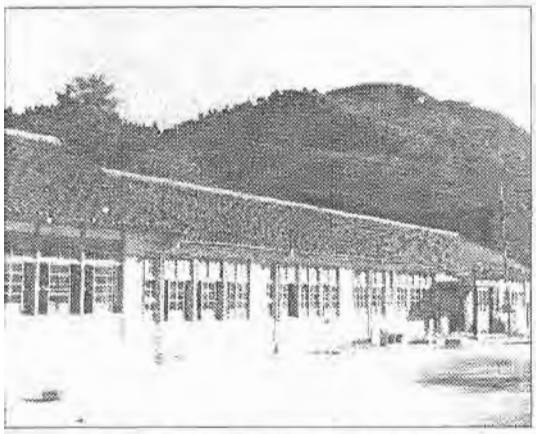
ふる里は、今も私に

岐阜県在住　山田宣男
久保尾内原山出身

今年九月はじめ、昭和二十一年から二十三年に久保尾小学校を卒業の同窓会を焼津在住の水口剛男さんをはじめ、幹事の皆様のお世話により、川根温泉で集うことができました。

約五十年ぶりの再会であり、なかなか顔と名前が一致しなくて、はじめは戸惑いもありましたが、小学校時代の話しになると、当時の記憶がよみがえり、先生のこと、めじろとりや、小川での水浴び、野山をかけまわっての鬼ごっこや、ターザンごっこ、等々話しはずみ、夜遅くまで語り合い、旧交を暖めることができました。またお互に元気で今日を迎えることを喜びあい再会を約束し、西へ東へと家族の待つ地へと別れて行きました。還暦をすぎ、ふる里を離れて五十年近くたっても、ふる里のことは片時も忘れたことはない。「ふる里はいいなあ」がみんなの口ぐせでした。



久保尾小学校　昭和46年に南部小学校に統合されて長い学び舎の歴史をとじました。

さて、このたびふる里通信発刊五十号、誠におめでとうございます。今日まで懐かしいふる里中川根の香りと情報をお届け下さった小沢様をはじめ関係者の方方に心からお礼を申しあげますとともに、大変でしょうが今後も長く続けて下さることをお願い申しあげます。十六歳まで過ごさせていただいたふる里の想い出はたくさんあり、とても短かい文面に表わすことはできませんので、帰省の折、その節々に詠んだ俳句か川柳か短歌かわかりませんが、書面を汚させていただきます。

ふる里の庭出で見れば　塚の山

帰省の折、生家の庭へ出て向う山を見れば
そこには、子供の頃と変らぬ塚の山がある。

わが車　杖と頼りし　老いし母

母は晩年足が不自由であったが、杖をつくのは嫌ったようだ。昭和五十五年ごろ帰省の折、母の実家、春野町川上へ行って見たいというので私の車に乗せ、生家の近くまで行った。実家へは寄りたいとは言わなかったが、母にはこれが最後の里帰りとなったのではないだろうか。

ふる里のこだまは今も変わらねど
生家に母の次女なし

昭和五十七年八月、母は七十八歳で他界した。

ふる里の山河は今も昔と余り変っていないが、父母のいない生家は淋しいものです。でも暖かく迎えてくれる兄夫婦や家族がいる限り、ふる里へと足を運ぶつもりです。

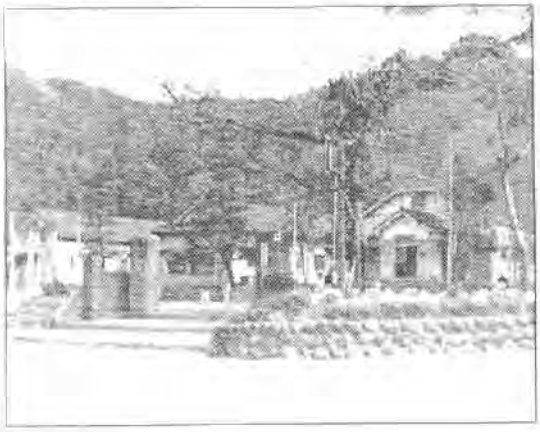
勝山三郎校長の思い出
―ありがとう徳山―

千葉県柏市　清水光雄
昭和二十年徳山国民学校教員

ふる里通信49号ではからずも勝山三郎校長のお写真を拝見し懐しさの余りペンを執りました。

志太郡徳山村徳山国民学校に赴任の命をうけた私が、大井川鉄道の煤煙で黒くなって駿河徳山駅舎に下車したのは、昭和十九年九月で初秋の風が心地よかったが、四方が山に囲まれ一見して狐か狸の出そうな僻地と分かり、町育ちで若冠二十歳の私は都落ちした寂しい気持だった。改札口では紳士が出迎え「校長の勝山です。お待ちしていましたよ。」と声を掛けられた。勝山校長と最初の出会いであり、以後三年半部下として仕えることになった。小柄、三分刈り、色白、ややおでこ、口髭、笑うと子どもっぽい顔に。これが第一印象であった。

勝山三郎先生と徳山小学校を校門付近より撮った写真
徳山小学校は右側校舎は近年まで残っておりましたが、徳山コミュニティ防災センターが建っております。



学校は駅から歩いて五分、校庭の一段上に二棟の木造校舎が建ち、国民学校に改称されても昔ながらの小学校の感じである。田野口ほか一カ所（壱町河内）に分校があり、児童数五百人、教員数十一人、川根地方では大きい方だった。私は四畳の宿直室を下宿代わりに自炊生活を始めた。勝山校長は下泉の自宅から汽車通勤をしていたが、宿直室の前を通る時は「おはよう」と声を掛けるので、「親父さん、今日も元気で来てくれた。」と安堵した。学校の親父的存在の校長が一日でも不在だと、新米教師の私は不安でたまらなかった。

明けて昭和二十年三月、校長から六年担任を命じられ、若輩の身で初等科最高学年は荷が重過ぎると辞退すると「君以外に居ないから頼む。」と頭を下げられやむなく承諾した。男子教員は次々に応召し、残った男子教員は高等科を受持つので、六年生は私以外に居なかった。

戦局は緊迫し、米軍はすでにサイパン、ラバウルなど重要拠点を奪取し、沖縄に迫っていた。食糧増産が急務になり校庭を掘り起こして芋類や南瓜を作り、山菜取りも日課になった。また出征兵士の留守宅に出向いて、麦刈り、茶摘みの手伝い、さらに軍の使役として藤皮・竹皮などの供出や木炭運び。……これは過酷だった。十キロ前後の木炭を背負って四キロの山道を歩いて駅まで運ぶのだが、足が血だらけになる子がいて、「勝つためだ、頑張れ。」と激励する教師も辛かった。

また、出征兵士の見送り、遺骨の出迎えや慰問文書き。さらに敵の上陸に備えて竹槍訓練。夜は夜で灯火管制の下でB29の爆音に脅えた。米機は御前崎を目標に大井川沿いを北進し、東京方面に向かったが、川根地方は丁度

その道筋に当たり、焼夷弾を落されたり、まい上空で体当りする空中戦を目撃して児童たちは震え上がった。

新茶の季節を迎えると都会から疎開児童が急増し、私のクラスだけでも十四人が編入してきたので教室に入れ切れず廊下に机を並べた。そんなある日、弁当盗難事件が起きた。山菜取りに出た留守の教室で弁当が盗まれたが、犯人はすぐ分かった。幼い時に母と死別し、父は出征中のため親類に疎開していた児童で、空腹に堪えかねての盗みで、三回目だと自供した。職員会議で児童の扱いが討議されたが、勝山校長は「内々で済ませたい。すべて私の責任だ。」と頭を下げたが、この時の目は泣いていた。――戦争さえなければ――これも付け加えたかったであろうが、立場上口にできなかったのだと思う。

木炭運びや山菜取りにも同行した勝山校長は、自ら作業に加わって、「ろくなものは食べていないのだ。無理せんでもええ。」が口癖であり、また竹槍訓練でも「怪我をするんじゃないよ。」これを心配していた。校長として「お国のためだ。もっと頑張れ」と叱咤しても当然であるのに、ついぞこれを口にすることはなかった。これは奉安殿に対する態度にも窺われた。両陛下の御真影と教育勅語を保管する奉安殿は、学校で最も神聖かつ重要で、前を通る時は最敬礼を義務づけられ、校長は常に無事安奉を祈願し、万一焼失など事故があれば自殺して責を負うことが珍らしくなかった。勝山校長はどうか。私は空襲から奉安殿を守る役目を持った宿直室下宿であったから、口やかましく注意されると思っていたのに、勝山校長は、これを説いたことはなかった。戦争はいずれ敗けいくさと確信していたのか、反戦論者を隠していたのか、その真意は分からないが、戦争に対して熱心ではなく、消極的であったのは明白である。

学習方針にも表われている。防空頭巾を片時も離さず、空襲や勤労奉仕の合い間に学習する毎日だったが、〝読み書きソロバン〟つまり国語と算数の学力だけはしっかり身につける〟教師や児童にこれを徹底させた。この勝山教育の基本理念には私も同感で、空襲に脅えながら大井川鉄道に乗り静岡市に出かけて県立図書館から本を借り、学級文庫として読ませ、また一日百字書取りを励行させた。四十年後に担任児童のクラス会に招かれ〝空襲下の腹のへっている時の読書や書取りは苦しかったが、やがて大人になって大へん助かった〟こう発言した者がいたのでほっとした。戦争末期は飢えと空襲で、兵隊ばかりでなく、銃後の国民も、いつ死んでも不思議ではない時代であったが、将来を考えた教育理念のもとに、五百人の児童と十人の教員を導いた勝山校長であった。

昭和二十五年頃、東京に出ていた私に勝山校長から「息子が東京の学校に行くので下宿を世話してくれないか。」と依頼があり、恩を返すのは今だと、四方八方手をつくして探したが、東京の食糧と住宅事情は最悪で見つからず、そのうち勝山校長から、見つかった、と手紙をもらい、ご期待にそえなかったことを詫びた。その息子さんも教育者として貢献された由、泉下の勝山校長もお喜びであろう。川根地方で勝山校長の教えを受けた人は多い。私も青春時代に仕えて感化された。

そして徳山――寂しい僻地と敬遠した赴任地であったが、住めば都で愛着がわいた。その上、素晴らしい担任児童にも巡り会えた。

――ありがとう徳山――

幼年・少年時代の思い出

本川根町　中野　昌男

嘘か本当か判らない

大正十五年四月、東川根村尋常高等小学校へ入学した私は木綿の着物に藁草履、本は風呂敷に包んで背中に背負い、お弁当は別の風呂敷に包んで本の横にしばりつけ、集合所へ集まり、先導の六年生に手を引かれて一列に並び一里の道を歩いて元気よく登校しました。

六年生になって間もなく東京の池袋第二尋常小学校へ転校しました。静岡の山の中から東京へ出て、衣服や言葉のちがい、風俗習慣、ことに学校の授業の方法等、すべての事に面くらう事ばかりでした。ようやく中学の試験に合格、羅紗の制服に編上靴はなかなか馴染るのに一苦労でした。

東京は、池袋、目白、新宿方面が「山の手」といって屋敷街、浅草、上野方面が「下町」と言って商人の街、活気溢れる商店街でした。ようやく一人歩きが出来るようになり、浅草の観音様へお詣りに行き、人波の中を中見世付近をブラついてみました。

当時はマイクも電気のメガホンもない時代で、奇抜な看板や人目を引きつける大声を出して自分の店へお客の目を足を向けさせるのに一生懸命でした。

〝オットット・オットット〟と大声がすぐそばで起りました。ハッとして立止まったら〝オットセイの衣料は当店だけだよ。中へ入って手に取ってよく御覧、うんと負けとくよ〟と呼び込みます。

たんたん商店街を奥の方へ行ったら、毛皮屋の店先にベニヤ板一枚ぐらいの大看板が立掛けてあって黒山の人だかりでした。ようやく前の方へ出て覗いてみたら

「このかわうその皮
ほんとのかわうその皮
両棲類最高の毛皮」

と書いてありました。私は本当の獺の皮か？嘘の獺の皮か？どうもうまく読めませんでした。皆さん如何ですか。もう一度読んでみて下さい。

『このかわうその皮　ほんとのかわうその皮』

当時十三歳、六十五年前の私の青春の入口の一コマでした。

私と二・二六事件

昭和十一年二月の終りの一週間は、中学四年生の進級試験の真最中でした。

二月二十六日は英語、公民、化学の三科目の試験の日でした。不得手な科目ばかりで心配が先に立ち、朝早く目覚めました。表を見たら何時の間に降ったのか、白一色の銀世界でした。

食事もそこそこに、すぐ近くの武蔵野電車（現在の西武鉄道）の椎名町の駅へ行ったら、駅員が「今日は事故のため電車は通らないよ。」と言いました。積雪で線路がどうかなったのだ……と思い、仕方がないので家へ引き返し、自転車を引っぱり出して乗ったり、雪の上を担いだりし

て、立教大学の前を通り、池袋駅西口へ、東口へまわり環状線を飛鳥山の方面へ、坂割で右折し大正大学の前、庚申塚、とげぬき地蔵さん、巣鴨駅前を通って白山の東洋大学と京北中学校の校門へようやく辿り着きました。

東京は山手線も市内電車も乗合自動車も、その他人っ子一人通らない、風情のあるべき雪が不気味に見える白一色の無人の街でした。校門は堅く閉っていて校庭へ入れません。学友達も三々五々集まって、可成の人数になりました。そのうち、完全軍装に身を固めた配属将校の森田少佐殿だったか、五十君少佐殿だったか一寸記憶が曖昧で申し訳ないが出て来られました。

私の学校は近衛歩兵第二聯隊から少佐が配属将校として赴任され、軍事教練全般の指導に当っておられたのです。そして"生徒一同に申渡す。本日未明国家の非常事態が発生したから、今日の試験は中止、無期延期する。すみやかに家へ帰って指示を待て。"と言われました。

私は早速手を挙げて、「教官殿、僕等は試験を受けないと、落第してしまいます。困ります。」と言ったら、「馬鹿者、国家の浮沈に係わる非常事態に、そんなものはどうでもよい。すみやかに家へ帰れ、流れ弾が来るかも知れないから家の中に閉じ籠って表へ出るな。よくラジオの放送を聞いて、流言蜚語にまどわされることのないように、落ち着いて行動せよ。」と言われました。仕方なく無人の大東京の雪の中を夢中で引き返して家に辿り着きました。

翌二十七日に東京市に戒厳令が布かれ、香椎浩平中将が戒厳司令官に任命され、二・二六事件が発生したことがわかりました。

空には『アドバルーン』が揚って、

兵に告ぐ　今からでもおそくはない！
天皇陛下の御言葉が出たのだ
無駄な抵抗は止めてすみやかに原隊へ帰れ！

と書かれてありました。新聞の号外もたくさんばらまかれました。街角や道路のいたる所に銃剣を着けた兵隊が警戒し交通整理等を行ない、挙動不審な者は憲兵が連れて行きました。商店は午後八時に店を閉め、全てのネオンサインは消され文字通り死の街と化しました。事件は数日で終り学校も始まりましたが、戒厳令は七月十八日まで続けられました。

一方世情は十一月二十五日『日独防共協定』が成立し、翌昭和十二年七月七日、盧溝橋事件が発生、はてしない泥沼のような支那事変、日中戦争へと突入しました。

さて、私の進級試験ですが、そんな具合でいまだに無期延期です。学校は四月に新学期が始まり、私も五年生になっておりました。

流言蜚語、非常事態、非常時、動員下令、戒厳令、商店法、防諜、軍事機密、国民精神、総動員……等々はじめて耳にした言葉や、直面したものばかりです。

六十年前の青春の一コマでなつかしく想い出されます。

平成十年敬老の日　記

私のニューヨーク見聞記

静岡市　西田亨司

昨年迄は父の臨終や中川根ふる里通信への投稿、それを基にした自分の文集作り、そして昨秋実施しましたウオーキング計画、又高校時代の同級会等ふる里とのかかわりが続きました。ところが今年になり息子家族がニューヨーク勤務のため二月に赴任したのがきっかけで、親として当然ながら気持ちが自然とその方へ動くことが多くなりました。級等とはその後電話FAX郵便等で絆を交わして来たのですが、このたびようやく現地視察？を兼ね、旅行のチャンスが到来し身内で二番目、わずか一週間ですが、店は娘に任せて妻と行って参りました。以下その主な見聞記ですが、お付き合いいただければ幸いです。

グリニッヂ

今回、私どもはここにある息子夫婦の家に滞在したのですが、当地はニューヨーク州の北隣りのコネチカット州の南端に位置し、ニューヨーク州と接し、NYケネディ空港からは、車で高速道路経由、一時間半位のところです。

アメリカでは西のビバリーヒルズ"東の"グリニッヂ"と云われるほどのお金持ちの住む街だそうです。丁度日本の東北地方と同じ位の緯度なので、晩秋を迎え街は紅葉一色でした。

決して山があるのではなく平地の到るところに育った樹々(大木)が紅葉しているのですから、その壮観さは格別です。公園等の緑地も多く、庭や囲りの緑地には、リスがピョンピョン飛び跳ねるのが見られ、何んとも云えないエキゾティックの感が致しました。

高速道路

ルート95"とか呼ばれる高速道路を何度か、息子夫婦いずれかの運転で行き交いしました。

これは料金無料でアメリカ東海岸沿いを南北に走っているもので、片側三車線で、ニューヨーク州やコネチカット州を何百キロ走っても、平坦な道路で、両側に見える樹々の紅葉がすばらしく、見事な景観にうっとりするばかりでした。私どもは百近い出入口(インターチェンジ)を通過しましたが、その下は、立体交差している場合が多くありました。勿論高速からは、人影、自転車、オートバイ、軽自動車類は全く見ることが出来ず、アメリカの広大な土地、車社会の現実をイヤというほど思い知らされました。

ショッピング

前述しました高速沿線にある大型店に、おみやげ等のために立寄りました。いずれもケタ外れに大型で、驚くばかりでした。

★ショッピングセンター(クリントン)

いわゆるテナントの集合体で七〇軒ほどの店がありました。この近辺には民家は余りなく、広大な敷地に駐車場を設けた、日本での効外店的なものですが、一体どこから、これだけの人が集まるのか、不思議に思われるほど混雑していました。

★百貨店(ナイシーズ)

主体は百貨店ですが、テナントも入っているようでした。ビルの中央部が円形にくり抜かれ、中央にエレベーターが透明体で上下し広大な売り場と、品数の豊富

さ、美観は、さすがでありました。全米一の店舗数を誇るとのことです。

＊スーパーマーケット（ステコーレオナルド）

全米でも有名なマーケットとのことで、単位面積当りの売上高は、全米NO1を誇るとのことで圧倒されることばかりでした。外からは見すぼらしい建屋にしか見えないのですが、中に入って驚いたのは、広いことは勿論ですが、まるで"市場"の様な雰囲気が感じられたことです。

先ず牛乳等を原料からパック詰めする自動工程が、窓越しに見学できるようになっているかと思うと、肉売り場では皮をハイダ動物が掛けてあって、注文に応じて、料理する方法もとられていました。又、人形の音楽隊や、模型電車が天上を走行し、子供達を楽しませてくれていました。百ドル以上買い上げると、アイスクリーム贈呈のサービスは、日本と同じかなと思いました。三十台近いレジが、ほぼお客様でいっぱいの状態を見て、何るほど効率のいい売上をしているのが、頷けました。

学校

嫁の交渉で孫達の行先の学校見学が許されたので、約一時間見学させていただきました。

＊コスコブ（Cos Cob School）

この学校は日本でいう公立校で、幼稚園（年長）クラスから小学五年生までの学校です。アメリカらしいアカデミックな学園で規律にしばられない自由な校風を感じ取ることができました。私の孫はキンダー年長で若い女の先生が担任でした。一学年八十人が四クラスに分けられ、いずれのクラスにも日本人の子供が二～三人いる様でした。壁という壁、それに教室内は教材がいっぱいで、実習が重視されているのだと感心しました。又別の日、週一回、二才の長男が通う体操ジムも見学しました。

マンハッタン

日本人だけのバスツアーを申込んであったので、参加して来ました。当日はコロンブスデーという祝日でしたので、日本人バスガイドは上気嫌でした。セントラルパーク附近から出発し、国連本部、三四ロメートルの高層ビルの世界貿易センター屋上からの展望、六千人乗りマンモス客船からの自由の女神の見学をしました。

午後二時頃からバスツアーとお別れし、五番街の散策をし、電車、タクシー等を乗り継ぎグリニッジへ帰りました。当日はクリントン大統領がマンハッタンへ見えるということで、街は物々しさがあるようでした。

マンハッタンはビルも古いものが多く、街も決してきれいではありませんでしたが、世界をリードする街らしく活気に溢れていました。

最后になりますが、私は今回片ことの英語も話すことが出来ず、Rest room（トイレ）さえも知りませんでした。しかし何が幸いするか分りません。そのことで、帰国飛行機の座席がエコノミーからビジネスへランクアップされ、誠にラッキーな中で今回の旅を終えることが出来ました。

東京のかたすみから（二十三）

❀テレビの始めから終りまで

湖畔の宿

渡邉實夫

血統的に音痴の私にも、調子っぱずれではあるが、心を込めて歌える流行歌が一つだけある。昭和十五年九月十六日、私が小学校四年生の初秋のことであった。

上長尾小学校のイチョウや桜の葉の色が変わりはじめ、秋の気配を感じ出した校庭の一角でのこと、校長中島先生の朝礼訓話がはじまる八時少し前、数分間の出来事であった。

山のさびしい　みずうみに　ひとり来たのも　悲しい心
胸の痛みに　たえかねて　昨日の夢と　たき捨てる
古い手紙の　うすけむり

年長の少年・少女が口ずさみ、私たち下級生もそのメロディーに声を合わせ一斉に歌い出した。歌声は広い校庭内に伝わり響き渡った。

それは前夜、隣村「藤川の祭り」で、村の青年男女の合唱に合わせて、代用教員をしていた若い西村あや先生が仮設舞台で踊り皆が興奮した歌であった。

後から知ったが、それが、戦前戦後を通じて銀幕の女王、大歌手として一世を風靡した高峰三枝子の「湖畔の宿」であった。その時の校庭の様子が六十年経った今も私の頭から離れない。

大正七年十二月二日生まれの高峰三枝子は、この曲を昭和十五年の十月レコードに吹き込んだ。ところが当時の日本国は戦時体制下にあり、軍国歌謡が全盛時代のため、厭戦ムードの強い『胸のいたみに　たえかねて・・・』と歌う「湖畔の宿」はまかりならん、と言うことで、ヒットしたことがかえってアダになり、『退廃的につき発禁』の憂き目にあってしまったのである。

若き日の高峰三枝子
別冊週間女性より

しかし、彼女が軍部の要請で、特攻基地を慰問した時のこと、当時、禁止されていたはずの「湖畔の宿」を是非歌ってほしいと隊員から申し出があり、歌うと、それを静かに聴いた後、敵地に向かい、飛び立って帰らぬ人となった若い特攻隊員がいた。後に彼女はことあるごとにそのことを話していた。

私が彼女と出会ったのは「藤川の祭り」から二十五年後、東京オリンピックの中継放送が終った頃だったと思う。

昭和三十九年の秋、私の勤務先であるテレビ朝日のスタジオであった。ああ、あの人が高峰三枝子かと思ったが、出演準備にいそがしそうだったので、声を掛けなかった。

そして彼女と最後の出会いになったのは、私の定年間際、プロダクションへ出向していった時のこと。外出からスタジオ前室の私の席に戻ると彼女の声が聞こえて来た。私にとってはマイクを通さない初めて聞いたナマの声であった。瀬戸口柳子ディレクター担当の報道番組「サンデープロジェクト皇室番組」のナレーションの収録に来ていた。

この時、私は初めて彼女に次のような話をした。

「私の故郷の藤川のお祭りで、『湖畔の宿』が歌われ村中を湧かしたこと。それを聞いた小学生たちが翌日、上長尾小学校の校庭で朝礼前に、このメロディーを合唱したこと。私のすぐ上の兄が武雄、辰夫であることなど」

そしてサインをお願いしたところ、彼女はサインは自宅

でするようにしているからと言って、その日は別れた。翌日「武雄様へ……高峰三枝子」、「辰夫様へ……高峰三枝子」とサインをした色紙を、付き人に持たせて届けて下さった。

録音終了後、間もなく、私の家の近くの「日産厚生会玉川病院」へ入院して、平成二年五月二十七日、永久の眠りにつかれたのである。

先日、確認のため、事務長に会って入院当時の様子をお伺いした。彼女は衰弱しきっていて、会話が出来る状態ではなかったそうだ。とにかくマスコミが押しかけてきて、取材、インタビュウなどの対応や、記者会見場の設営などに苦慮したようだ。当時の主治医はすでに転勤していて、高峰三枝子の最後については何も聞けなかった。

彼女のサイン入りの色紙は、母キクの看病で帰郷した折、私は兄達に渡した。しかし、少しも喜ばなかったことを覚えている。

戦時中、武雄兄は徴兵されて満州に赴き、辰夫兄は志願して横須賀海兵団に入った。軍国主義の真っただなか、鬼畜米英をやっつけることのみ専念して、ひたすら御国のために働いていた彼等には、「湖畔の宿」はおよそ縁のない歌であったのだろう。そんな歌手も歌も知らなかったようで、まさに猫に小判であった。

私ごとで恐縮だが、本年二月二五日に亡くなった武雄兄の四十九日の整理で、このサインが出てくるかな、と思っていたが、とうとう見つからなかった。来年二月の一周忌にも、おそらく出ないと思う。彼女がこの世で最後に書いてくれたサインであるから、私は忘れられないのだが……。

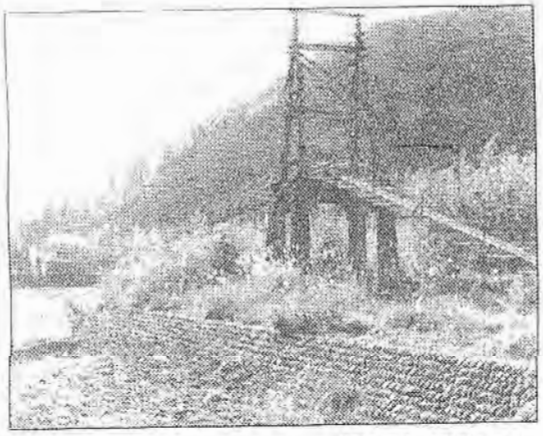
彼女が入院直前、体がぼろぼろになるまで、なぜ仕事をしたか、それは皇室番組の音どりのためで、テレビ朝日の場合、スポンサーや関係者の強い要請から、皇室もののナレーションは彼女に指定されていたからである。

このようなケースは他にもあった。例えば太平洋戦争番組のナレーションは芥川隆行、という具合に決まっていた。このようにして、各テレビ局は有名人の特徴あるナレーションで、それぞれ局のカラーを出していた。

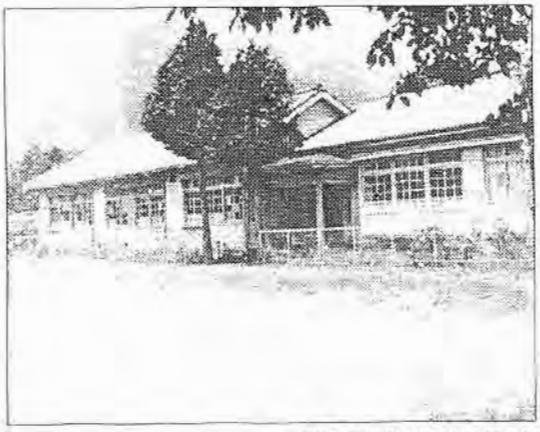
流行歌を分析して書いた「近代日本の心情の歴史」の中で、東大教授の貝田宗介氏は、「湖畔の宿」は民衆が自ら愛した最後の曲の一つで、字が読めなくても歌うそが、当時は書き物よりはるかに重要な民衆のメディアであったと述べている

一九九八年　十月　記。

思い出のアルバム



旧涼徳橋　S37年まで



田野口小学校　S41年統合

ふるさと夜話
天皇が生神であると言われた時代

原田耕作

この話は平成七年「川根文芸戦後五十周年記念特別号」に掲載させてもらいましたが、それ以前、文章は少し違っても同趣旨で「峯村曹長を憶う」の題名で、静岡新聞読者の言葉に載せてもらいました。また静岡市内で発行の文芸誌「水韻」にも私の戦争体験として書かせてもらいました。

ふるさと夜話には適切でないと思いますが、しかし我が町からも随分多くの人達が生死にかかわらず戦争犠牲者となっています。私共は決して戦争を忘れてはなりません。こんな意味でふるさと通信にも愚稿を書かせてもらいました。

太平洋戦争前、日本には、国民が気付かずして信奉していた天皇宗という宗教があって、其の宗教を利用した軍部に依って、戦争が引き起こされた、ということを聞いたことがある。今にして思えば、確かにその通りだったと思う。

小学生時代から私共は、日本で一番偉い人・一番有難い人は、天皇陛下であると聞かされて来た。しかし、なぜ偉いのか、有難いのか、それは全く判らなかった。私は日本で一番えらい、ありがたい人は学校の先生だと思っていた。それも直接学問を教えて下さる受持ちの先生だと思って居た。親の言うことは聞かなくても、先生の言うことは絶対きかなければならないと思っていた。その先生が、天皇陛下は日本一えらい人だ。ありがたい人だと教えてくれたから、何が何んだか判っても判らなくても文句なしに偉い人、ありがたく思わなければならない人であると思ってきた。その天皇は、私共が成人してから、いつの間にか人間ではなく神様になってしまった。

昭和十三年秋、事情あって私は人のきらう警察へ入ることになった。その練習生時代、国学院大学の偉い先生の講義をきいた。先生の説は、日本の国、即ち瑞穂の国は、大昔、神によって作られた国である。神ながらの国である。神ながらの国を統治なさる天皇は、まさしく生きて居る神であると説いてくれた。偉い先生の講義でもきている神である、と言うことに対して、私は直ぐ信ずることはできなかった。

歴代の天皇のなかには皇后の外に、局と呼ぶ女性を十余人も持たれた御方がある、ということを聞いている。神様がなぜそんなに多勢の女性を必要としたのか、その必要については、それはここに書かなくてもみなさんお判りのことと思う。生きている神であるから必要だったのである。

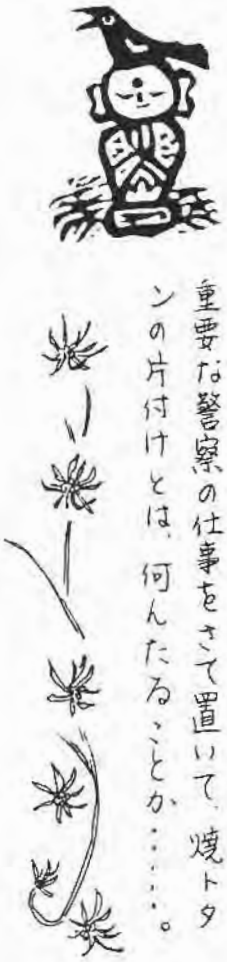
警察官となった私は、いつしか天皇宗の信者となってしまった。そして「陛下の警察官」という信念をたたきこまれた。陛下の警察官という言葉によって、如何なる悪人に対しても怖れない肝っ玉が備わったことは事実だった。現天皇が皇太子の時、沼津御用邸へ三回も御警衛に勤務したが、万一の場合、命はいらないと思ったのも、天皇宗によるものだった。私の先輩に竹の杖一本で、日本刀をふりまわした犯人を袋小路へ追いつめ、取り押えた巡査があったが、矢張り陛下の警察官として命も惜しまなかった、即ち天皇宗の信念に依るものだったと思う。

戦争が敗戦に近づいた昭和二十年四月、天皇の軍隊と言われた陸軍に、私も思わざる召集を受けた。当時私は経済警察に居って、第三国人による大きな経済事件と刑事事件の併合犯検挙に全力を注いで居った時の召集だったので、実に無念残念だった。

歓呼の声に送られて出征した戦争華かなりし日とは打って変って、私の場合、郷里の役場から村長名で赤紙入りの封筒が一通、静岡警察署経済課内宛に届いただけ。入営時には兵事係が同行する事になって居たというが、何んの汐汰も無く非情なものだった。空襲があれば汽車は動かず、鉄道の時間表は名ばかりのものだった。私は静岡市の家主のトラックに乗せてもらって四月八日の入営前日、名古屋市の笠寺町迄行き、疎開で死の街となっている家主の娘の家を探して行き、只ひとり宿泊することにした。夕食と朝食は持参した梅干入りの握飯。その夜は押入に残されてあったふとんを出して一夜の仮寝。翌日の入営は名古屋城、ひとり城門をくぐった時は、さすがに心細く自分が何とも惨めに思えた。

私と同時に入営した者は、百二十名。みな一家を背負った中年男。そしてそれが皆、二十才の時の徴兵検査には、丙種の不合格者ばかり。そして今召集された年令は二十八才から三十五才、まさしく老兵の集団だった。支給された破れた軍帽・汚い古軍服・両足揃っていないドタ靴・入営後十日間位、焼野原に変り果てた名古屋市の焼トタンの片付けだった。全く馬鹿馬鹿しくて腹が立った。

重要な警察の仕事をさて置いて、焼トタンの片付けとは、何んたることか……。



老兵集団の私達は、五月になると名古屋から中央線を二十四キロはいった高蔵寺町(現春日井市)の弾丸製造の工場の警備のため、高蔵寺部隊という小さな部隊に配属された。私の兵種は高射兵だと聞いたが、それは名ばかり、高射砲はみな戦地に出してしまって、台座が残っているばかり、銃だけは在るが、それも使えるものは一丁もないという。

私共は荒地になってしまっている元の畑地を開墾して、さつま芋の苗を挿し、南瓜の種を蒔き、茄子を作り、荒れ果てた水田を起して稲を植えた。全くの農兵になった。生まれながらの百姓の私は、農耕は苦にならなかったが、警察の務めを考えると、毎日の軍務という仕事が、こんなことかと馬鹿らしくて腹が立った。

老兵集団の中では、私は比較的体格が良かったためか、常に食糧運搬等の重量使役に呼び出された。トラックに乗って見知らぬ所へ行くこともあった。大豆の受取りに黒田という町へ行った時、向こうから妙な一団がやって来る。近づくと、何んとこれが兵隊である。五十人位の一団は、みな竹筒を一本肩にかけている。竹筒は水筒用なのだ。汚い軍帽・汚い軍服・汚いドタ靴、帯剣も無い。つかれきった足取りで歩いている有様はどう見ても軍人には見えない。浮浪者の一団としか見えない。自分等も歩いていたら、あの通りの姿だろう。この惨めな軍隊、これが今日の天皇の軍隊かと思うと、私は言葉がなかった。

「上官の命令は朕が命令と心得よ」この御詔勅によって、最下級の二等兵は、一等兵以上の兵すべてに、何事も絶対服従しなければならなかった。この御詔勅は一等兵以上を皆「朕」にしてしまって、二等兵はみな犬か猫の様

な扱いを受けた。私は二等兵で戦死した若い人達が気の毒でならない。

尚、天皇の軍隊について一言書き加える。ある朝中隊長の訓事の際、応召兵の上等兵がチラッと侍目をしたらしい。"コラッ 今貴様どこを見た！"と中隊長がどなると同時に上等兵の腹を長靴で蹴り上げた。上等兵はバタッと倒れてしばらく起き上れなかった。倒れた兵士に目もくれず中隊長は金切声で叫んだ。"戦争は負けん。必ず勝つ！"

私は中隊長はきちがいになったかと思った。

兵士の携帯品点検の際、あけびづるで作った弁当箱が無くなった兵があった。幹部候補生少尉のおそろしく意張る奴が点検官だった。「支給品を無くせるとは何ごとだ。たたき切ってやるから鉄かぶとをかむって出てこい！」とどなった。言われた兵士は出て行ったが鉄かぶとはかむらなかった。兵士はおちついた口調で「あけびづるの弁当箱より自分の方が役に立ちそうにありませんか。」と言った。候補生少尉は一瞬とまどったが「良いかえれ！」とどなった。

この無茶苦茶軍人の言葉一切が朕の言葉、即ち天皇の言葉として通用したのが日本軍隊だったのだ。

八月十五日 戦争は惨敗して終った。私は無茶苦茶軍人共に対して"ざまを見ろ！"と言いたかった。しかし軍隊でもこんな意張りくさる奴ばかりが居たわけではない。老兵をいたわり、常に温顔、自ら何事にも先頭に立って兵士を引っ張った時枝下士官があったことを忘れない。

おごりを極めた軍人によって、生き神として利用された天皇はお気の毒であった。戦争に敗れた事は残念だが、そのために人間天皇の宣言をなされて真の人間に戻られたことが嬉しかった。私は戦争に依って天皇尊敬の念を一時失ったことがあったが、現在は益々国民に親しまれる皇室として御繁栄なさることを嬉しく思っている。

ふるさと夜話第二十三話　終

戦争で亡くなられた人々＝中川根町＝

明治10年から昭和21年まで　「平和の礎より」

戦名	勃発年次	戦没者数
西南の役	明治10年(1877)	2人
日清戦争	〃 27年(1894)	0
台湾派兵	〃 28年(1895)	0
北清事変	〃 33年(1900)	1人
日露戦争	〃 37年(1904)	17人
日独戦争	大正 3年(1914)	0
シベリア出兵	〃 7年(1918)	3人
山東出兵	昭和 3年(1927)	1人
満州事変	〃 6年(1931)	0
上海事変	〃 7年(1932)	2人
支那事変	〃 12年(1937)	17人
ノモンハン事件	〃 14年(1939)	9人
太平洋戦争	〃 16年～(1941)	300人
	全体で	352人

西南の役戦没者
・藤川 梶山文吉様 ・久保尾 樫下利吉様

地区名	明治10年～昭和3年まで	昭和7年～太平洋戦争	計
藤川	2	43	45人
水川	0	31	31人
上長尾	1	26	27人
高郷	0	13	13人
八中	0	8	8人
梅高	2	13	15人
下長尾	1	16	17人
瀬平	3	12	15人
久保尾	3	23	26人
久野脇	1	27	28人
徳山	5	41	46人
田野口	1	20	21人
志町河内	2	6	8人
文沢	0	1	1人
下泉	2	18	20人
地名	1	30	31人
計	24人	328人	352人

平成5年3月30日発行
「平和の礎」……中川根町出身戦没者名簿……
編集・発行　中川根町遺族会

「平和の礎」あとがきより

明治、大正、昭和、百二十年余の三代にわたり、国のために青春の若い生命を捧げられた、中川根町出身の三五二柱の御魂が、長尾川の清流のほとり、木立にかこまれた、平和のたたずまいの中に、忠魂碑として、静かに、永久の眠についております。

死んだ人びとは、還ってこない以上、
　生き残った人びとは、何が判ればいい？
死んだ人びとには、慨く術もない以上、
　生き残った人びとは誰のこと、何を慨いたらいい？
死んだ人びとは、もはや黙ってはいられぬ以上、
　生き残った人びとは沈黙を守るべきなのか？

これは、「きけわだつみのこえ（日本戦没学生の手記）」の序文の一節です。

このことばのように、戦争に生き残った私達は、亡き人びとに代って、何を考え、何をしたらいいのか、お互いに自らに問いなおさなければならないと思います。

戦後五十年、半世紀にもなろうとしている今、戦争体験者も少なくなり、平和を旺歌し、豊かさの中で平和の礎となられた人々のことや戦争の悲惨さも、時に風化していく感じさえあります。今こそ、私達は残された者の責務として、国のために殉じた人びとの崇高な魂を永遠に記録し、末代まで残こし、平和への誓いを新たにすることが求められております。

写真、右上段
中川根町忠霊塔
下段右
旧中川根村忠魂碑、
下段左
旧徳山村忠魂碑

旧中川根村忠魂碑は、初め、智満寺境内に、後上長尾小学校横にと、移り、現在の所に永住されました。
旧徳山村忠魂碑は田野口小学校横の所から現在の所へ移りました。遺族会の皆様が時おりお掃除にまいられ、いつも美しくまつられております。

出版物紹介「中川根の方言」

発行所　中川根町町史研究会
B5版　100ページ　　1,000部限定出版
集録語　1,873語　付録　文集　19題

発刊の言葉より

「方言」は、その土地に於て、何百年、或はそれ以上の古代から、伝統的な、また独特な「話し言葉」として、十年一日にも似て変わることなく、受け継がれ、日常あらゆる有形無形の表示や、その他一切の伝達手段として、独自の「味わい」をもち続けてきた。

それには喜怒哀楽はもとより、よりデリケートな感情をも含む、人間的な心のぬくもりがあり、時として怒りが籠められ、場合によっては冷酷に相手をつっぱねる表現であったりして、その使用範囲は、実にさまざまな、その時の感情を伝えることができる、完璧な人類文化として、われわれの生活を支配して来たのである。

それは少なくとも、二十世紀後半に至っても、尚此の傾向に変化は無かったと言えるかも知れない。しかし二十世紀後半も、その末期に至ってその様相は著しい変化を示している。

つまり新しい科学文化の発達によって、急速に標準語化への道をたどる方向に転じたのである。それはあらゆる情報手段として、言論誌、電波放送など、すべて標準語が常識となって、一般化したことに拠るものと言えるようだ。

この洗礼を真っ先に受けたのが、当然「方言」であろう。「方言」は日を追って消滅の運命を背負わされ、やがて山中の一小村ですら、それを避けることは、不可能になって来ているのが現状である。その傾向は遠からず日本全国に波及するだろう。つまり「方言」の消滅である。

京都弁、大阪弁、東北弁などは、一応民族的にも特殊なものとして、生き残る可能性が或は、あるかもしれないが、わが中川根のように、古くから比較的標準語に近い地方とされている静岡の、一山村の「方言」などは、容易に標準語に同化し易い可能性は否定できないだろう。標準語への最短距離にあるということである。

二十世紀最後の「小さな方言集」として、本誌編纂に踏み切った理由も、いつの日にか、かつて、何百年か、この地方の伝統として、土地柄のシンボルであった其の言葉を、後世に遺すことによって、いわゆる「文化遺産」の一端とすることができたらという、ささやかな願望ゆえである。

おそらく、各地の方言が大方は消え去っているであろう二十一世紀の半ばである紀元2050年まで、本誌発行部数の半分を残しておきたいと考えるのも「文化遺産」としての、文化価値が、果してどのように後の世に問われるのだろうか。

此の小冊子の存在が、言語学的な一資料としていささかでも評価されるところあれば幸いである。

中川根町町史研究会　会長　河村計三　識

『中川根の方言』を販売します。

1部 500円 郵送料 250円

申し込みは ハガキか封書にて
お願いします。　〆切り日 3月31日
申し込み先　〒428 0313
中川根町上長尾859－6 小沢節子

代金は 発送時に郵便振替用紙を同封しますから、ご利用下さい。

B5版、100ページ、ワープロ写植印刷、左、参照

町史研究会で、方言収集作業が終って、原稿を預かって1年後の出版となりました。実は、左記方言の、じあいの横に（名詞）といったように、動詞、形容詞、副詞等の分類を、全ての言葉に付けたのですが、それが大変むづかしい作業で、出来上ってから、何人かの先生に、見てもらいました。が、最終的には、全て、文法は取り払ってしまいました。
「方言」には文法は、考えない、という事で、すっきりした次第です。が本作りには、沢山の時をかけました。

より理解する為の用例、意味、その他の項も、真剣に取り組みました。

ワープロ作業中、考えた事に、町内各地区に残しておきたい事などを話し言葉で、文章に出来たら、と思い各地区25名の方々にお願いしたら、16名の方が、すばらしい文章を書いて下さいました。　是非、ご覧になって下さい。

し

方言	用例、意味 その他
じあい	体の調子。具合。健康状態。「じあいが悪い。」
しいしい	しながら。「加減しいしい。」
しーえる	することができる。
しーしび	生がわき。「干し柿がしーしびになった。」
しーなびる	しなびる。
しかくい	四角な。
しくたー	いくじのない人。根性の無い人。
しくたやろう	他人に対する罵声。
しぐれ	小雪。
しぐれる	小雪がちらつく。
じぐるう	あばれる。「じぐるって苦しがる。」
しげい	度重なる。
しこったま	たくさん。どっさり。「しこったまもうける。」
……しざー	……しましょう。
……しずよ	……しましょう。「ええかげんに御飯にしずよ。」
しすかっちょう	するわけがない。「そんなことしすかっちょう。」
しずらい	しにくい。
しだじ	汁。汁のだし。
したべろ	舌。
しだらがない	だらしがない。
じちもない	だらしがない。
じちゃあくちゃあない	乱雑。
じちゃあない	だらしない。乱雑に広がっている。
じっきに	すぐ。間もなく。「じっきに来るら。」
しっちらん	全く知らない。「ひっちらん」
……しっかあー	……しようか。
……しっかい	……しましょう。
しっぱくり	着物のすそをあげること。

いろみことば

竹下時夫
ち為

「」客　『』家主（女房）

「今日は、こぶさたしています。」

『あれあれ、ほんに、よくおいでなすって、いつもいつも、ごぶさたいたしまして、お寒うございます。そこは、冷とうございますで、まずまずお寄りなすって。

ごあいさつが遅れまして、お早うございます。お寒うございます。まあまあ、御立派におなりなすって。さあさあ、どうぞ、どうぞ。』

「おばさんも、お元気でようございますネ。」

『ねエ、お陰様で、ありがとうございます。でももう年齢（とし）でございます。さして云うとこは、ございませんが、ひとところに比べますと、あちこち、ごぶさんしてねエ。毎日のお留守番がやっとでございますヨ。

さあさあ、そこは、上りはなでございます。こちらの方へ、どうぞお寄りなすって、昨日からすこし冷えますんで、どうぞもちっとお火近へ、どうぞどうぞ、おそうなりまして、お祖茶でございます。お先にどうぞ、お先にどうぞ。』

「頂きます。結構なお味で、ごちそうになります。』

『まあまあ、お祖茶でございます。ごゆっくりなすって、おくんなさいまし。おっつけ家の人も帰って来るころでございましょう。今時畑の仕事も、さしてございませんようで。まずまず、お楽になすって』

「どうもごちそう様でした。また伺います。」

『あれあれ、ごゆっくりなさって下さると、うれしいですが、折角おいで頂きましたに、なんのお構いもいたしませず、失礼いたしました。ありがとうご

次ページへ続く

ざんした。あいにく、留守をいたしまして、何かご用の向きも、ござんしたでしょうに、相済みませんことで。私では、とんと用を足しませず、ごめんなすって。　ありがとうございました。どうぞ、お大事にお帰りなすって、ごめん下さいまし。』

あとがき

原田耕作翁が、『いずみことば』を町史研へ送れと、三度訪ねて来られた。「いずみことばは京から来た。小嶽天神も京の分社だ。なんとか残せ。」と。いずみことばの穏やかで優雅な調律は、文字で残せないのではないか、困ってしまった。

その昔、行き交う下泉のおばさん達の言葉のリズムは、誰に対しても、全く変わらなかった。

働きの男衆は、酒席や庚申の晩は、フザケて、おおぎょうに、方言で話しをおかしく拡げ、例えば（ばっちらがって食った）とか、（はたいたもんで、こっぱずかしかった）などと騒いでいても、女衆は、ニコニコと座の中にいた。つまり、方言は百も承知で、どんな場合も家祖伝来のリズムを崩さなかったらしい。

流れるような、ゆったりとした、貴族リズムは、やはり京にかかわりがあるのだろうか。

中川根の方言　付録より

昨年十一月下旬より、取りかかった、五十号はとうとう年を越して、一月十七日の発刊になってしまいました。大勢の皆様に寄稿していただき、本当にありがとうございました。今回載せ切れなかったものも次回号でお届けするつもりです。

記念号として、いつものページ数の倍となりました。冬の夜、ごゆっくりご覧いただければ幸いに存じます。

今回より、会費の値上げさせていただき、誠に恐縮しております。紙面の充実に心がけたいと思いますが、皆様のご意見、お待ちしております。

ふる里通信は、一方通行だけでなくて、相互通信になります様、これからもよろしくお願い申し上げます。寄稿や、情報、是非、お送り下さい。

昨年は雨、雨、雨と、大変な降雨量となりましたが、十月頃より、乾燥に変わり、ここ一ヶ月ほど、雨が降りません。そろそろ水不足では、と心配しております。空気が乾燥して、寒い時期、風邪など、引きませぬ様、おすごし下さい。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共　200円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行（季刊誌）を予定しております。今回で購読料の切れる方、始めてふる里通信をご覧になられる方には、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続きご購読をよろしくお願いします。

購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

郵便払込通知票、00870－4－81556

加入者名　中川根ふる里通信係

ふる里通信に関する問い合わせ先・及・

発行責任者　〒428－0313

静岡県榛原郡中川根町上長尾859－6

小沢節子

TEL　0547－56－0015